

池田文書の研究 (42)

勲功華族の書簡 (その6)

池田文書研究会

[86] 井上毅の書簡

井上毅の書簡は『東大医学部初代総理池田謙齋』下巻に19通掲載に付省略。

[87] 児玉秀雄の書簡

当家は徳山藩士家。

秀雄は明治9年生まれ昭和22年没。児玉源太郎の長男。拓務・逓信・内務・文部の各大臣歴任。伯爵。享年72。(1876-1947)

1 大正7年12月20日 (496)

正五位勲六等男爵 池田秀男

本年六月東京市養育院基金トシテ金参百円寄附ス、依テ木杯壹組ヲ賜フ。

大正七年十二月二十日

賞勲局総裁 正四位勲二等伯爵 児玉秀雄

角印 (賞勲局総裁之印)

(注) 池田謙齋は大正7年4月30日死去。長男秀男は同年11月23日没す。

補 足

宮家の書簡

[3] 北白川宮家使の書簡

25 明治19年5月8日 (2541)

来ル十一日当宮ニ於テ踏舞会御催可相成之処御延会、更ニ来ル十八日御催相成候間、午後七時ヨリ御来臨相被下度、命ニ依リ参上仕候也

十九年五月八日 北白川宮使 樋口綾太郎

[7] 伏見宮家関連書簡

4 明治 年 月 日 (3536)

口上

十七日頃より御葉いつこうに召上り不申候処、一日ニ一度くらいの事、此節ニ至り御葉何も召上り不申、誠ニとふわく致居候也、御つうし丸も召上り不申、此節ハ何も召上り不申、御つうしは廿二日迄、其まへニ四日つゝけ毎朝御少々ツ、あらせられ候、外の御召上り物に御かわりあらせられず候也

伏見御息所⁽¹⁾ 御容体

一月廿六日

(1) 伏見御息所 伏見^{さだなる}貞愛親王妃・利子^{としこ}王女。有栖川幟仁親王第4女子・穂宮。安政5年生まれ。昭和2年没。享年70。(1858-1927)

5 明治 年 月 日 (1087)

口上

鳥渡一筆申入まいらせ候、扱は伏見御息所御容体此節ハ昼夜とも御さへあそハし、御容たいも少々筆紙ニは申されず、右ニ付池田さま御宅之節何時なりとも一寸私参り御めに懸の上ニ候て委しく申度候間御都合の時間一寸仰戴度願候也、こなたへ御出の節はなかなか委敷御容体申かね候間、まつまつ其御宅へ参り度候也、一寸御返事承り度候、かしく

〆

池田さまへ 人々用事

有奥ニテ 杉

前宮家の書簡

[1] 清棲家々従の書簡

当家は伏見宮邦家の第15男子家教が、当初佛光寺を相続したが後に伏見宮家に復歸し、その後臣籍降下と共に清棲家を興し伯爵を授けられる。

家教は文久2年生まれ大正12年没。山梨・茨城・和歌山・新潟の各県知事歴任。享年62。(1862-1923)

1 明治 年12月26日 (1590)

口上

一、金五百疋

右例年ノ通り当歳末ノ御印迄ニ被贈度候ニ付為持上候、御受納被成下度候也

十二月廿六日

清棲家々従

池田殿

2 明治 年1月22日 (1591)

拝啓、時下厳寒之候御座候処益御安祥珍重奉賀候、然は主人義昨日已来少々不快ニ付、甚乍御苦勞本日午後御主人御来診被下候様願上度候ニ付、此旨可然御執計之程御依頼申上候也

一月廿二日

清棲家々扶

池田殿

執事御中

公家華族の書簡

[4] 九條家関連の書簡

10 明治 年12月19日 (2752)

謹啓、益御清祥之段大賀不斜奉存候、迂生義御蔭ニ由リ昨夜無異到着仕候間、乍憚御承了被下度候、随テ九條殿道中格別之御変状無之候得共、新橋停車場より戸塚駅迄之間ニ於テ咯血ニ回、次回之分は稍多量ニテ且ツ御咳嗽モ甚敷相成リ候、右は乗車中激動之為歟と愚考仕候ニ付同駅ニ於テ三時間程静臥為致、御処方之抱氏散モヒ、鉛糖之合剤等相用居リ候処、咳嗽呼吸不利等緩解仕候、尔後藤沢駅泊リ迄差シタル御変状無之、翌朝ニ至リ痰中ニ極々少量之血液相見候而已ニテ即今迄別状無之候得共、御咳嗽等平常之咳嗽よりは少ク相増

居リ候様ニ付、キナ煎劑ニ老分一オンスヲ和し用ヒ置キ候、追日御平常之御咳嗽ニ復し候ハ、単ニキナ煎劑相用度ニ付此段御伺申上候、肝油は即今御用ヒニ相成リ居リ候、早晚御変状有之候節ハ猶御教示ヲ蒙り度候得共、先道中之御容体而已上申仕候、頓首敬白

十二月十九日

熱海ニテ 松野稟郎

先生 閣下

武家華族の書簡

[30] 浅野守夫の書簡

当家は広島藩家老家。浅野道興は文化12年生まれ明治17年没。維新の際国事に尽力。その功により明治33年嗣養子守夫に男爵位が授けられた。享年70。(1815-1884)

守夫は安政2生まれ昭和13年没。広島県の殖産興業に貢献。男爵。享年84。(1855-1938)

1 明治38年3月25日 (82)

拝啓、益御清福慶賀之至りに存候、陳は本日貴族院男爵議員補闕選挙会に於テ不肖当選の栄を得候は全く尊台之御推選ニ依リ候結果と深く感謝之至りに存候、此段御挨拶迄如斯御座候、敬具

明治三十八年三月廿五日 男爵 浅野守夫

男爵 池田謙斎殿

[31] 伊東祐婦家従・家扶の書簡

当家は日向飢肥藩主家(5万1千80石)。

祐婦は安政2年生まれ明治27年没。子爵。享年40。(1855-1894)。妹養子は亀井茲明夫人。

1 明治 年2月1日 (505)

前略御免、陳は主人祐婦事昨今持病ノ気味ニ候間、其思召ニテ御調合被下候様奉願上候、頓首

二月一日

伊東祐婦 家扶

池田様御内

小原様

2 明治 年2月8日 (504)

伊東祐婦之散葉、此ものニ差上仰付被下候様御願申上候

二月八日 伊東祐婦 家従
池田様
御調薬所御中
二白、黒木林平之含薬ヲモ此者にて御願申上候

[32] 新田^{ただすみ}忠純の書簡

当家は新田義重の後裔で幕末には120石の旗本。新田^{としずみ}俊純は文政12年生まれ明治27年没。幕末新田勤皇党盟主として戊辰戦争に功あり。明治17年男爵位を授けられる。享年66。（1829-1894）。妹武子は井上馨夫人。

忠純は安政3年生まれ昭和6年没。俊純の長男。貴族院議員。男爵。享年76。（1856-1931）

1 明治 年8月28日 (2370)
拜啓、弥御安康奉賀候、扱過日は御病気御全快御
帰京之由誠ニ恭悦ニ付今朝一寸御伺仕候処、御参

内中之御留守にて拝眉不得残念ニ奉存候、扱去ル
五月先生ノ御罹病前荊妻事甚敷子宮痛ヲ起シ候後
下リ物致ス事アリ、其節先生ニ御来診ヲ願全快仕
候処、又々先月末ニ至リ右之如き容体再発ニ付、
隣家ニ在住ノ赤十字社病院へ出候高橋種紀ト申人
ニ一寸診察ヲ頼ミ手当致居候得共十分ニ無之、右
高橋氏より照会にて橋本先生ニ兩度診察ヲ乞候
処、今之中ニ療治致置候方可然トノ事ニ付本人も
其儀ニ決シ昨日より赤十字社病院へ入院為致候
処、明廿九日一時ニ手術施シ候、本人も此度ハ先
生ノ御治療ヲ不願誠ニ残念カリ居申候、今朝右等
御話申上置度ト存候処、不得拝顔遺憾ニ存候間甚
乍失敬以書中右申上且御病気御全快之御悦申上
度、草々敬白

八月廿八日 新田忠純
池田先生 貴下

医師の書簡（その1）

A 池田多仲（玄仲）とその医師達

池田多仲は池田謙齋の養父。多仲は石見国津和野藩々医の長男として生まれ、長じて藩医を勤めるが種痘所の設立に尽力し、幕府奥詰医師に取り立てられる。幕府の各種書付を書き取っているがこれは後記する。多仲関連の医師達の書簡は殆ど『東大医学部初代総理池田謙齋』上巻に掲載した。ここでは漏れたもの及び関連の書簡を掲載する。

[1] 伊東玄朴関連書簡

玄朴の書簡は『東大医学部初代総理池田謙齋』上巻に33通掲載した。

玄朴は肥前国生まれ、シーボルトに蘭学を学ぶ。後に蘭方医として初めて幕府奥医師に取り立てられ法印長春院と称す。享年71。（1801-1871）

34 () 年12月18日 (197)
✍

(端裏書) 中沢善司様 伊東長春院
今朝新庄右近方え書中にて委敷願遣し候達進書も
為持遣し度申候、使未婦り不申、尤私近日罷出尚
又伺願可申心得ニ御坐候、折悪敷不快中延引呉々
も奉恐入候、書外縷々奉期 其 顔候、頓首
臘月十八日

[2] 伊東南洋の書簡

南洋は天保年間に佐藤泰然らと長崎で修行した蘭方医。生没不明。

南洋の書簡は『東大医学部初代総理池田謙齋』上巻に1通掲載した。

2 () 年4月21日 (3241)

✍
(端裏書) 多仲様 南洋
昨夜は皆様御光駕被下千万難有奉存候、如兪終や
無間断手当仕候へとも、少しも変化相見不申候
間、病人差出し申候、宜敷奉願候、実ニ再生之洪

恩病人ハ勿論一同感激ニ不堪候、右申上度、早々以上

四月廿一日

尚々御銘々人差上候筈ニ御坐候へ共病人差出候ニハいろいろ手数も相掛り甚困り居候間、館中より御触被下候様仕度此段偏奉願候、若又三宅方え此者直ニ御遣し被下候てもよろしく候、いつれ無程さし出候、先一応此段申上候迄、早々以上

[3] 伊東朴齋の書簡

朴齋は『馬療新篇』の訳者。生没不明。

朴齋の書簡は『東大医学部初代総理池田謙齋』上巻に1通掲載した。関連書簡を記す。

1 ()年6月12日 (3253)

其後は打絶御無音罷過候段御仁恕可被下候、時下大暑ニ相向候処、益御安康御勉強之御事珍重奉存候、此地御後室様皆々様御揃被成、御無事被為入候条御安堵之御事ニ奉存候

一、御門生進藤整齋事春來病氣之処、追々大患ニ相成帰国も相叶不申候由ニて国元え巨細容体申遣、且金子差下し可申旨ニ付此度差遣候由ニ御坐候、右は整齋同藩ニ股野一郎右衛門と申仁有之、下拙懇意ニ仕候人ニて則此者より承知仕候、一体同人其表え罷越候義は老母并ニ兄共至て不承知之処を右一郎右衛門之取成しニて参り候様ニ相成候事ニ御坐候、附てハ此度病氣容体書国元より同人方へ相廻しニ付、下拙方へ罷越右体ニてハ何れ帰省も不相叶、誠ニ心痛致候事故私より尊君迄万端御配意被成下、万一亡命致候節は右金子等差下し候間、右等之処御取計被成下候様願上呉候趣申出候、固より御門生之儀申上候迄ニも無御坐候得共、何分万事御心添被成下一度快復可至候様仕度、彼ハ元老母之極愛子ニて、遠足等ハ差留候得共無理ニ罷下り、右様病氣ニ相成てハ実ニ其愁傷察入候事ニ御坐候間、幾重ニも御配慮奉願上候、御地之景況時々御留守宅ニて承知仕候、愈御盛ニ被為入候由何寄之御事ニ奉存候、此上尚日夜御勉強之程所禱ニ御坐候、大槻君ニも御帰府後未ダ長髪外出も不相成候由、実ニ御氣之毒千万之事ニ奉

存候、扱長州一件も兎角遅々仕、此頃之様子ニてハ愈大坂表より繰出しニ相成候由、困入候事御坐候、実ニ天下一統物価沸騰ニて当地杯も此節ハ市中一揆大流行ニて富家へ押入、白昼ニ家財を打破其乱行言語同断之事ニ御坐候、大坂杯も同様之よし、御地ハ如何ニ有之候哉、横浜表次第ニ盛大ニ相成、近々陸軍役之伝習相始り皆々罷越候様ニ相成申候、融徳如何消日致居候哉、乍憚宜敷御伝声可被成下候、先は右整齋一条相願度、如此ニ御坐候、何分ニも御配意伏て奉希上候、追々酷暑ニ相向候間、尊体御自愛万々奉禱上候、早々不具

六月十二日

朴齋

緒方洪哉様⁽¹⁾ 侍史

- (1) 緒方洪哉 緒方惟準^{こいよし}の通称。緒方洪庵の次男であるが長男が夭折したので実質は嫡男。池田(入沢)謙齋は緒方家に入籍後池田家に入籍した。従って義兄弟の関係にある。詳細は平成3年7月発行日本医史学雑誌第37号第3巻記載。又緒方惟準の書簡は後記する。

[4] 緒方洪庵の書簡

洪庵の書簡は『東大医学部初代総理池田謙齋』上巻に7通掲載に付省略。

[5] 大槻俊齋の書簡

俊齋の書簡は『東大医学部初代総理池田謙齋』上巻に21通掲載に付省略。

[6] 桂川甫周の書簡

甫周の書簡は『東大医学部初代総理池田謙齋』上巻に1通掲載に付省略。

[7] 竹内玄同の書簡

玄同の書簡は『東大医学部初代総理池田謙齋』上巻に1通掲載した。関連書簡を記す。

2 (文久2年12月9日)

(端裏書) 覚

伺之趣は年始五節句月次御礼共羽目間え罷出、出順之義は御薬園預り芥川小野寺次え可被罷出候事

（注）池田多仲「備忘録」中に同文あり。竹内玄同が池田多仲に宛てたもの。池田多仲はこれらの覚書を纏めて「備忘録」を作ったものと思われる。

[8] 戸塚静海の書簡

静海は幕末の蘭方医。幕府奥医師。寛成11年遠江国掛川生まれ明治9年没。享年78。（1799-1876）

1 安政6年10月15日 (3426)
（端裏書）種痘所之儀ニ付奉願候書付写シ

戸塚静海 伊東玄朴 伊東貫齋 竹内玄同 亀井隠岐守医師池田多仲と申者、伊東玄朴門人ニ御坐候処、先達て下谷和泉橋通り小普請組小笠原順三郎支配勤仕並安井甚右衛門山本嘉兵衛地面之内借地仕、家業之者共申合種痘仕候儀順三郎より御内慮奉伺候処、伺之趣不苦旨被仰渡候ニ付、同業之者共申合家作取建種痘施療仕候処、其後猶又種痘所之儀ニ付御声懸リ等之儀、同業之者共より地主へ申聞、其段順三郎より申上候書面先達て小川仙春院半井通春院え御下ケ有之、御尋之節私共ニおいても素より同様奉願度儀ニ御坐候間、右之通相成候様仕度旨申聞、仙春院通春院ニも存寄無之趣にて其段御請申上候儀ニ御坐候処、其後未タ何等之御沙汰も無之内申上候は甚以奉恐入候得共、種痘所之儀は私共兼々志願にて結構不被仰付以前同志之者共申合一且取建候処、間も無之類焼仕、猶又当時之場所へ取建、玄朴門人多仲え借地為仕、同業之内老分之者共頭取取締致させ日々割合出席為仕候儀ニ有之、一躰牛痘種法之儀は万皆過失無之良法にて衆人救恤之業ニ御坐候処、世上往々紛敷種法流伝仕再痘之憂、又は甚敷ニ至り候ては性命を傷ひ候類も御坐候哉にて、夫が為に純粹之種法迄諸人之疑惑を請候次第ニ至り何とも歎ケ敷、兼々心痛罷在候間、何卒前文種痘所之儀ニ付申上候趣御聞濟被成下、此度同所ニおいて牛痘之種法施療仕候趣其筋々え御触流も被成下候ハ、御威光を以牛痘之良法有之候儀末々迄相弁へ、且は杜撰之種痘等仕候者も自ら無之様可罷成と重畳難有仕合奉存候、右之趣御聞届被成下候上不苦儀ニ御坐候ハ、私共申合時々種痘所え出席世話仕、

往々不取締之儀出来不仕候様、猶又夫々規則相立種痘は勿論初心之者共治療教導方をも為相励、追々御用立候者出来候様仕度志願ニ罷在候、尤諸入用等も相懸り候儀ニハ御坐候得共、全ク同志之者共申合如何様ニも相続仕候様取計可申と奉存候間、幾重ニも厚く御賢慮被成下候様偏ニ奉願候、以上

月 日 戸塚静海 伊東玄朴 伊東貫齋
竹内玄同

右之通安政六己未年十月十五日小川仙春院・半井通春院両法印添願書相添、頭取岡村丹後守殿へ指出落手ニ被相成候、最初之願書ハ同年六月中差出候也

年十二月十八日

[9] 林洞海の書簡

洞海の書簡は『東大医学部初代総理池田謙齋』上巻に9通掲載に付省略。

[10] 箕作阮甫の書簡

阮甫の書簡は『東大医学部初代総理池田謙齋』上巻に4通掲載した。関連書簡を記す。

阮甫は寛政11年生まれ文久3年没。美作津山藩々医。幕府天文方蕃書和解御用掛として外国文章の翻訳に当たる。享年65。（1799-1863）

5 () 年3月6日 (964)

（端裏書）種痘館御出席衆中様 箕作阮甫 諸君御安康被成御坐奉拜慶候、然は蕃書調所組頭被相勤候田上作左衛門小児種痘相願度由にて老生紹介致しくれ候様申事ニ御坐候間、何卒御種被下候様奉願候、右相願度如此御坐候、以上

三月六日

6 () 年11月7日 (963)

私義当七月中より疝痢相煩候ニ付、池田多仲え療治相願服薬等仕、其後竹内渭川院え転業仕、種々手当仕候得共近日疲労相増、別て此程より差重全快可仕體無御坐候ニ付、死去仕候節ハ嫡孫承祖貞一郎⁽¹⁾へ跡式無相違被下置候様奉願置候間、此段各様より御願可被下候、已上

十一月七日
 河本幸民殿⁽²⁾
 杉田玄端殿⁽³⁾
 堀達之助殿⁽⁴⁾

箕作阮甫 印

大助教	大医員 大主典	二等医師 中医員 権大典	三等 少医員 少主典	大医士 権少典
中医士	少医士	大医生	中医生	少医生

- (1) 箕作貞一郎(麟祥) 箕作阮甫の嗣養子省吾が早く亡くなった為、孫の貞一郎が跡継ぎとなる。麟祥に就いては日本医史学雑誌第57巻4号池田文書の研究(42)に記載した。
- (2) 河本幸民 幕末維新期の物理・化学・蘭方医学者。文化7年生まれ明治4年没。
- (3) 杉田玄端 福井小浜藩医。杉田家養子となり杉田玄白家を継ぐ。外国奉行支配翻訳御用頭取。文化元年生まれ明治22年没。
- (4) 堀達之助 長崎オランダ通詞家に生まれ日米和親条約の和解に当る。文政6年生まれ明治27年没。
- (注) この書類には箕作阮甫の印影はない。

B 池田謙齋とその医師達

[1] 明治3年北海道・樺太派遣医師等の書簡

池田(入沢)謙齋は池田多仲の養子となり、長崎にて医学修行中幕府の崩壊により江戸に戻る。慶応4年3月両番格歩兵屯所付医師、明治元年9月病院医師試補、11月病院医師、明治2年3月二等医学校医師病院掛、5月病院当直医官、7月大学大助教に任ぜられる。明治3年4月少典医兼任を命ぜられ、同月明治天皇を拝診。明治3年12月ドイツ留学の為出国、明治9年5月帰国する。

1 明治3年1月27日 (1835)
 (端裏書) 池田謙齋様 要用平安

柴岡活治・安藤精軒
 新禧之御慶万里一般芽出度申取候、先以貴所様益御多祥可被成御超歳扑喜之至奉遥賀候、随て小生等家中無恙加馬齡候間乍憚御放念可被下候、然は先般小生共等級之義、小丞殿へ委細申上置候、御医局へも其節申上候様奉存候得共其書状相違不申候ては不都合ニ御坐候ニ付御周旋奉願度左之通、於当地大丞殿え定候相当也

御承知之通於医学校何レー等医師ニ可被仰付候様御沙汰ニ御坐候て月給等は貴所様御同様之処請取居申得共、当地ニテ二等拜命之御書付有之のみニテ大助教之給料受取候は不当、其上三等医師は少主典之月給受取居候事故二等権大主典之処至当とて東京ニテ御渡之分も引取候様大丞被申候、實ニ迷惑至極ニ御坐候間於医学校御定通給料御渡相成候様仕度と申は、元来一等二等杯は官位相当表ニ不当名目ニ御坐候故ケ様之不都合も差起候事ニ御坐候間、何卒当地出張中大助教拜命仕候か、一等二等ニても御地ニテ御約束と相違不致候様奉願度、此義は貴君へ奉托候間是非とも医学校開拓使へ御掛合相成候様少丞殿へ御迫り被下度繰々奉懇願候、何分ニも馬嶋君同様不相成候ては御約定ニ相違仕候間何卒宜様御周旋被下候様奉依頼候、三等之処遠路隔絶之地え独立出張仕候ニ付ては少助教之所ニ御当テ被下候様是亦御周旋奉願候、先は新曆御祝詞旁右事情相願度迄如此御坐候、余は期永日之時候、恐惶謹言

正月廿七日 安藤精軒⁽¹⁾・柴岡活治
 池田謙齋様 侍史

- (1) 安藤精軒 天保6年生まれ大正7年没。宮内省御用掛京都詰勤務。京都医副会長。享年84。(1835-1918)。安藤精軒の書簡は後記する。

2 明治3年4月 日 (2699)
 奉願口上覚 馬嶋春庭(綴り)
 奉願口上覚

私共一同開拓病院医師昨九月拜命之節夫々等級下賜、一等ハ大助教、二等ハ少助教、三等ハ大得業生ニ相当仕候旨、右は遠國奉命之者ニ付在勤中は格別之恩典を以本官相当之俸禄并御手当共下賜、難有夫々場所え出張仕候処、昨十一月ニ相成開拓病院医師官禄之義ハ総て准官之格合にて一等完^(ママ)御減方ニテ御渡可被成旨御布告ニ付、右は全く准官之御定則未建前之拜命ニ付、夫は言語之差謬よ

り右等之御議論ニ相渉り候てハ互寒絶遠之地え罷越、身命をも抛候程之気張も相掛け自然御差支之義出来致し間敷とも難申、甚心痛仕候間其段昨十一月当地詰判官衆え種々歎願仕候得共、其義不相叶当所は矢張准官之御振合を以御渡相成居候得共、樺太宗谷根室石狩ハ近比迄本官之俸禄其俣相渡居候処、此節御布告相達候より一等完滅し准官之御渡方ニ相成、其上是迄之過四分一完目ニ御引上ニ相成候趣にて元本官拜命之者諸場所え参り准官ニ相成候者も有之、実ニ難渋無此上失望之余り種々苦情申出候ニ付、此後事実御差支之義出来仕候ては甚奉恐怖候間、何卒格別之恩典を以在勤中本官之通り下賜候様奉歎願候、誠恐謹言

四月 函館詰 一等医師 馬嶋春庭 印
諸場所詰之人員左之通り御座候

函館詰	二等医師	塩田順庵
〃	三等医師	星 秀元
樺太詰	二等医師	柴岡活治
〃	二等医師	安藤精軒
〃	三等医師	矢野良橋
〃	〃	有馬元函
〃	〃	丸山淳平
根室詰	二等医師	林 洞斎
〃	三等医師	戸上玄朴
石狩詰	二等医師	平 帰一
〃	三等医師	齋藤龍安
宗谷詰	二等医師	岡田朴庵
〃	三等医師	堀本好益

3 明治3年5月29日 (1035)
御勤精奉拵賀候、陳は昨日池田君御談之義、今日東久世氏え及懸合候、別紙之通に御坐候間御熟読可被下候也

五月廿九日

二白、右別紙は御掛り之東校え御書載置被下度候相良権大丞殿⁽¹⁾ 島少監⁽²⁾

池田大助教殿

別紙添

(1) 相良知安^{さくらあきら} 佐賀藩医。天保7年生まれ明治39年没。明治初め医学取調掛としてドイツ医

学導入に功績あり。享年71。(1836-1906)

(2) 島義勇^{よしだけ} 佐賀藩士。文政5年生まれ明治7年没。明治2年7月北海道開拓使判官、翌年4月大学少監。明治7年佐賀の乱に加わり刑死。享年53。(1822-1874)

4 明治 年 月 日 (1467)
(端裏書) 樺太開拓使御掛り御中 控

相良権大丞・池田大学大助教以手紙致啓上候、然は其御使付属医師五人之内、柴岡活治・矢野良橋之兩人ハ今般交代不為致てハ不都合之義も有之ニ付、即右代り之者別紙之通人撰いたし候間、御使え御呼出之上御申渡し有之度、尤御宛行向一切是迄通り御渡しニ相成候様いたし度存候、外三人之者共ハ今壹兩年詰越候様此度達し遣候へ共、自然不都合之義も有之候へは其節交代為致度存候、此段及御答候也

(手紙下書き)

5 明治3年6月23日 (1457)
御校医師柴岡活治外四人樺太滞在期限之儀、過日御問合およひ置候へ共、右は今壹ヶ年詰越候様御校より当人え御達し有之候様いたし度、若又御不都合等之儀も有之候ハ、交代之人物御撰被御申候様いたし度、此段御懸合およひ候也

午六月廿三日
大学東校 御中

樺太開拓使

6 明治3年7月 日 (1468)
(端裏書) 樺太詰医師交代一条写願扣

小助教格

開拓二等医師 斗南藩 川村貞治

柴岡活治代り

大得業生格

開拓三等医師 半井從五位家来 小林玄同

矢野良橋代り

右樺太詰医師交代之者人撰いたし候間、当人共え御申渡之上交代ニ相成候様御取計有之度候也

庚午七月

大学東校

樺太開拓使御中

(池田謙斎筆の願書下書き)

7 明治3年 月 日 (3506)

樺太出仕医員

小助教格 二等 斗南藩 川村貞治

大得業生 三等 半井從五位家来 小林玄同

宿所本郷三丁目伊豆蔵横丁

右兩人先ニ被仰付至急発足為致候方可然候哉

8 明治3年8月21日 (2698)

急便取急き大乱筆御高免可被成下候

謹啓、六月廿八日御認之尊翰当月十八日飛来、難有拜見仕候処其貴校各位被為揃愈御安康奉職之義、大悦至極ニ奉敬賀候、随て爰元同寮中以高庇無異勤業罷在候間、乍憚此段御放念可被成下度、乍末毫御序ニ其御惣容様宜敷御鶴声奉希上候、然は交代一条六月下旬略申上候処、丁度行違ニ相成殊ニ尊翰延着ニて旁以御報も不仕失敬多罪候、然処根室詰之義は東京府管轄ニ相成、既ニ御府え場所引渡ニ相成候ニ付諸官員一同不日引揚ケ候間、林戸上之兩人共先帰京之積、併林洞斎義は当人格別迷惑筋ニも無御座候得は今一兩年箱館詰被仰付度、石狩札幌之義は平帰一來四五月頃迄詰越不苦様子、右ニ付齋藤龍安義も同様今一兩年詰越為致候て不苦、且同所え箱館在任之医生兩三輩差遣し置申候、星秀元少々云々不都合之廉有之、已ニ宗谷詰被仰付候、塩田順庵老何分老衰ニて御用弁相成兼候付帰京之積ニ御座候得共、当地在任之医生御雇候ニ付、代員御遣ニは不及、随て劣生義開拓使より今一ヶ年詰越之様御沙汰御座候得共、東校之辞令如何乎、御故障等無御座候得は詰越之義劣生ニ於テは不苦候得共、一応奉伺東校之御辞令次第進退可仕奉存候間、乍御手数可然様御所置之程奉願上候、何れ巨細は開拓使より東校え懸合可有之候得共、先御報旁右迄申上度此斯御座候、恐々頓拜

八月廿一日

馬嶋春庭

池田謙齋様

尚々乍憚御序之節東校各位え宜敷御伝声奉希上候、再拜

(注) 別封筒表に「馬島春庭殿後讓ト改名、明治二年頃北海道開拓使之依頼ニ付同道へ赴任

中え来書入」とあり。池田謙齋筆か。

[2] 明治9年以降の医師の書簡

池田謙齋は明治3年12月文部省派遣留学生としてドイツへ向け出国したが、明治7年在留中陸軍省派遣留学生に切り替え、明治9年5月帰国した。帰国後直ちに陸軍軍医監・宮内省御用掛・文部省出仕。明治10年1月東京医学校校長。同年西南戦争時陸軍々医監として九州に滞在中の4月東京大学医学部総理に任ぜられる。明治14年7月職制改正により東京大学総理心得となり、明治19年1月同職退任する。又宮内省御用掛として明治9年10月3等侍医。10年10月2等侍医。11年12月1等侍医。19年2月侍医局長官。22年7月侍医局々長。31年2月侍医局長辞任。同年同月男爵位を賜る。32年陸軍後備役満期退任した。大正4年勲一等旭日大綬章授章。大正7年4月30日死去。追贈正二位。享年78。(1841-1918)

[1] 相磯^{まこと}糙の書簡

相磯糙の書簡は『東大医学部初代総理池田謙齋』上巻に5通掲載に付省略。

[2] 赤星研造の書簡

赤星研造の書簡は『東大医学部初代総理池田謙齋』下巻に1通掲載に付省略。

[3] 足立^{もりよし}盛至の書簡

足立盛至は天保6年生まれ明治29年没。薩摩藩出身。代々藩医を勤める。足立梅景の名前にて佐倉順天堂佐藤尚中に学び、鹿児島にて天医堂病院を創立。享年62。(1835-1896)

1 明治 年7月19日 (62)

(欠)にて拜見仕候、先以其(欠)皆々様益御機けんよく(欠)揃御消光被遊候段珍重不斜奉存候、今般愚息盛一事段々御世話様ニ相成り難有御礼申上候、猶又此上とも宜敷御願申上候、随テ私事も無事罷在候間乍恐御安慮可被成下候、扱又養父より申来り候金子一条は年来ノ借財より身代限ノ事、并ニ善助ト申者養父醉眠中懐中より実印盗取

り百五十円ノ謀書致し候事件より、加藤・市川ノ
両家内室より百三十円借受候処、両家盗難ニ付返
金いたさねば不相成との事にて（^典）申来り
候、「池田後室え相頼ミ謙斎殿ヨリ百三十円借用
致し度頼込候処、金円ノ儀は難申出儀申聞当惑仕
候処、後室より五円差出して申候ニハ御子息御国
許にて盛大ノ趣ニ候間、御親子之儀之故御頼被成
候かた可然ト申ニ付是迄さへ種々難渋之節も頼候
事無之、今更怱へ迷惑掛候儀不本意之義申聞候得
は外々へ迷惑掛候より一応篤ト御頼可然トノ事ニ
付拙者生涯一度（欠）入御憐察被下、老後（^典）
と思召百三十円御恩投被下候得は無此上大幸
云々」大略如右御坐候、是レ又々義理ある父子ノ
事故捨ておくわけにもまいらず、私事も先年非常
之火災盗難ニかゝり漸く家内共無事を得たるの
ミ、此節追々しんき出来中ニ付別段余分之事も相
成りかたく、依之半金たけさし送り申候積リニ御
坐候、尤モ養父之事ハ兼テ存し居候事故御心配相
かけ候義は奉恐入候、巨細ノ義ハ来月愚息盛一上
京之節可申上候、右は御返事まで早々如此御坐
候、敬白

七月十九日 足立盛至

池田御後室様⁽¹⁾

猶々時下折角御加養専一ト奉祈上候、御序之節
左近允様へ宜敷御鶴声奉願上候

- (1) 池田久子 池田多仲の妻。池田謙斎の養母。
文政12年鹿兒島藩士左近允四郎左衛門の長
女として江戸芝薩摩屋敷にて生まれる。謙斎
没後も池田家を守り昭和5年没。享年102。
(1829-1930)

[4] 安藤正胤^{まさたね}の書簡

安藤正胤は弘化4年生まれ昭和元年没。明治4
年より8年まで侍医を勤めた安藤正道の養子。医
師。享年80。(1847-1926)

1 明治 年2月25日 (41)

益御清適之条奉拵候、陳は迂生隣家にて平松甚
四郎ト申仁先月十八日来気管支肺炎之症にて腐敗
性之咯痰アリ、預後甚不良之容体にて実は過日来

バルツ氏高木氏佐々木政吉氏等も診察治療罷在候
処、漸々衰弱相加り益預後之不良ヲ確信スル場合
ニ立到り候ニ付、其趣き本人并ニ家族之者ニ説諭
致し候処、此上は本人ニ於ても他に望ミ無之候得
は池田先生ニ一応診察相願候ハ、満足トノ事ニ御
座候、依テ冀ハ御往診被下度偏ニ奉願候、本人も
当時之大事業家故惜ムヘキ人物ニ御座候、甚突然
御多用之中乍恐縮御繰合之上本日中ニ御往診被下
度是又奉懇望候、此段得貴意度、草々敬具

二月二十五日 安藤正胤

池田先生

南茅場町四十三番地 平松甚四郎

2 明治 年3月27日 (44)

拝啓、陳は過日来平松甚四郎病中は度々御診察を
奉仰候処、病性素より陰重漸々衰弱を極メ今午前
四字五十五分死去仕候、此段御報知申上候、草々
頓首

三月廿七日

安藤正胤

池田先生

3 明治 年11月12日 (42)

益御清適御起居被為在候段奉拝賀候、偕過日来西
園寺氏御病人時々御来診被成下候段難有奉感謝
候、此前御廻診後幸にして熱勢挫折し昨今先平温
ニ復し諸症大ニ緩解之様子ニ御座候、併し肺之実
質は未だラブゼクターヘノ診断にては著しく性質
も不相見候ニ付、御都合次第御廻診被成下此後之
処置如何可仕哉御教示被下度奉願上候、余は拜謁
ニ譲り此段得貴意如此ニ御座候、頓首再拜

十一月十二日

安藤正胤

池田先生

4 明治 年6月8日 (43)

謹啓、時は薄暑御起居益御清祥奉拵候、陳は今
般茅屋に於て御同友之囲碁小集相催し晚餐ニは粗
末ナル支那風料理進呈仕度候間、来ル十四日午後
三字より惠然御貴臨被下度希望之至ニ御座候、
草々不一頓首

六月八日

安藤正胤

池田先生 盾皮下

再啓、同日若し御差支御座候ハ、甚恐入候得共
来ル十二日迄ニ御通知之程奉御煩候也

5 明治 年4月18日 (45)

益御清亨御起居被為在候段奉拝賀候、陳は八丁堀
地藏橋際元戸塚氏之住居へ今般引移り居候向井小
右衛門と申仁之娘、本年四才卒然会厭及ヒ鼻孔へ
達し潰瘍ヲ発し呼気極メテ悪臭ヲ帯ヒ、恐クハ実
扶の利質私症⁽¹⁾と奉存候、小生治療罷在候得共何
分危険之容体ニ御座候間、一応先生之御診察奉願
度申出候ニ付御繰合せ相成候ハ、何卒御廻診被下
度偏ニ奉願上候、草々謹言

四月十八日

安藤正胤

池田先生

(1) 実扶の利質私^{じふてりしす} ジフテリア

6 明治 年3月6日 (1104)

(前欠) 御海容奉願候、佐寫邨(欠)事五年前来
発病、一昨々来は一時アボプレキシ⁽¹⁾ヲ発し
漸々快方之处先年来再発之気味にて即今は諸症と
も一層増劇致し、実は是迄病院に入り又は諸君之

治療ニも預り居候得共、何分不治之症と相見在再
今日之容体に立到り、過日来迂生屢々罷在対症臨
機之治療致し居候処、追々危険にも可立到哉と焦
慮罷在候、就ては遠方之处、且御多忙中と云ひ恐
縮之至ニ奉存候得共、一兩日之中御繰合一応御診
察に預り度本人に於ても志願且迂生よりも偏ニ奉
懇願候、猶御来診被下候ハ、尔後治策御高按之程
御教示被下度は亦奉鶴望候、頓首再拜

三月六日

安藤正胤

池田先生

(1) アボプレキシ^ー 脳卒中

[主要参考文献]

- 朝日新聞社編『朝日 日本歴史人物事典』朝日新聞社
1994年11月30日発行
霞会館諸家資料調査委員会編『昭和新修華族家系大成』
上・下巻 霞会館 1984年4月10日発行
池田文書研究会編『東大医学部初代総理 池田謙齋』
上・下巻 思文閣出版 2007年2月25日発行
日本歴史学会編『明治維新人名辞典』吉川弘文館 1981
年9月10日発行